

平成18年度事業報告概要

(自平成18年4月1日 至平成19年3月31日)

1. 今年度は5ヶ年計画の後半に入る4年目にあたる。

以下、今年度の活動の概要を述べる。

2. 平成18年の事業計画の重点項目に沿った各事業別の主な活動状況は次の通り。

1) 連盟組織の改編

平成18年12月、福岡市博多区に九州支部を開設して九州地区における普及活動の拠点とするとともに、平成19年3月、同支部に併設する形で九州初の常設会場「福岡ブリッジプラザ」をオープンした。正式オープンに先立って、1月より体験教室を実施し、3月からは講習会を開始している。

理事会直属の代表選抜委員会を新設し、国際試合日本代表の選抜、助成に関する規程類の整備を行った。

中谷国際交流事業部長が3月31日付けで退職し、後任は吉田事務局長が兼務することとした。

2) 普及事業部

認知度向上のための広報活動

昨年度のウェブサイトリニューアルに続き、JCB Lの活動およびブリッジを総合的に紹介することで「信用度」をアピールし、「社会的認知度」を向上させる目的でブリッジの総合パンフレットを製作した。メディア、教育現場、官公庁、企業、ひいてはジュニア層の保護者などブリッジを全く知らない方々を相手にした普及活動で非常に効果があり、話もスムーズに展開したと会員・会友諸氏にも好評だった。また、これまで未開拓だった週刊誌、月刊誌などの雑誌社、テレビ、ラジオの担当記者に「ブリッジ」をアピールするため、基本情報を網羅し且つ読みやすいプレスリリースを作成、約230メディアに配布した。趣向をこらした広告をポイントや時期を絞って集中的に打つことで他メディア（主要紙・TV）の目を引き、効果的な記事掲載につながり、さらには連鎖反応の如く取材依頼が続々と寄せられるという非常に良い循環で、認知度向上の為の広報活動を行なうことができた。（例：1月の日本経済新聞特集記事掲載は、NHKでの番組放映、朝日新聞ウェブサイト版長文記事、タブロイド版夕刊紙掲載、格安価格での広告出稿オファーなど、さまざまな広がりを見せ、各地のBCに問い合わせが多く寄せられたほか、体験教室・入門講習会の参加者増大につながったなど、相乗効果ははかりしれない。地方においても普及に携わってくださっている会員・会友諸氏が地元メディアでの露出に懸命に取

り組んでくださった様子は、クリッピングサービス（ブリッジに関する記事を全国レベルで調査するサービス）を通じて知ることができた。「ブリッジ」の露出総数の詳細調査は実施していないが、昨年を大幅に上回っているのは確実である。J C B L・会員・会友が一丸となって認知度向上に努めたことが結果となってあらわれた本年度の活動であった。

地方への普及活動

今年度は、北と南に常設会場がオープンした。4月にオープンした札幌の「アウ・クル」、年度初めには予想もしていなかった急展開で2007年3月オープンにこぎつけた「福岡ブリッジプラザ」、ともに地元会員・会友諸氏の熱意と行動力で現プレイヤーが常に遊べる場所として、また新人育成の拠点としてスタートした。都会の現状と異なり、人を集めて初めてブリッジができることを熟知なさっている地方在住のプレイヤーの方々が力をあわせて実現した成果である。両会場とも、昔ブリッジをしていたという人々が常設会場オープンを知って集まり始めている。また国民文化祭が開催された山口市は県全体でも会友が3名、プレイするためには他県に行くしかなかったが、国民文化祭でメディアにとりあげられたのを機に、下関でプレイをしているグループ、昔プレイしていたが再開したいという人が名乗りをあげてください、終了直後からブリッジ交流が盛んに行なわれている。近年の傾向としてクルーズ（船）で初めてブリッジに接する人も多く、地元ではブリッジができないからという理由で毎年船に乗る人もいるとのこと。このように、ブリッジを覚えて下船し、全国に散らばっていく人たち、定年後故郷に戻っていく団塊世代の人たち、これからの地方はどこでもブリッジの芽が既にあることを認識して、それらを掘り起こして点と点を線にすることを心がけると同時に地域特性を充分踏まえて“顔の見える”地方普及活動を丁寧に行っていく。

ユースへの普及活動

東京大学、慶應義塾普通部のブリッジ授業はともに先生方の献身的な努力により順調に進行し次年度への継続が決まった。授業として定着している事実は次の教育現場でのブリッジ採用に大きな後押しとなり、ブリッジの「社会的認知度」「信用度」の裏付けとなっている。「ジュニアくらぶ」事業の独創的且つ積極的な展開により、ジュニア層では、1人がさらに友達を呼び寄せるという形で急速に広まっている。ミニブリッジからスタートしているこれらジュニア層をいかに順調にコントラクトブリッジに移行させていくかが今後の課題となるが、成功させて将来のブリッジ界を背負っていく世代を育てることを目標にしている。また、子どもがすることにより、関心を持つ保護者も増えている。ジュニアの特筆事項としては、全国で初めての高校ブリッジ同好会が開成学園に誕生したことである。このようなジュニア層、特に

高校生の「勢い」は現ユース層にも好影響を与え、日本代表候補登録者数も昨年の倍の28名に増えたなどユース全体の活性化に大きく貢献している。

一方、シニア層の勢いも顕著で、体験教室、入門講習会、練習サロン、ウィークリーゲームともシニア層が活き活きと参加。こういった様子がメディアにとりあげられて、また参加者が増えるという好循環で推移した一年だった。

3) 競技会事業部

競技会運営ソフト(JTOS)のバージョンアップ

バージョン2に盛り込めなかった機能を追加したバージョン2.4を2006年秋にリリースし、86ブリッジセンター・クラブ及びJCBL会員・会友92名に配布した。

ブリッジセンター・クラブ

クラブ選手権試合の開催回数制限を平成19年度から行うことに決定した。また地方クラブ会議を浜松リジョナルの場で開催し、各クラブの意見を聴取した。

ディレクター育成

ディレクター講習会に加えて、実地研修を行った。

図書管理システム

2006年11月から貸し出しを中止し、データベース入力のための図書の整理、検索キーワードの設定などを行った。

インターネットを利用したブリッジ

BBOを利用した競技会開催のため、2チームのチーム戦を2度実施した。

4) 国際交流事業部及びその他の事業

上海で開催された第44回PABF選手権大会では、オープンが準優勝と2002年のバンコク大会以来の表彰台を実現したが、レディスは11ヶ国中10位と低迷した。

シニアは3チームが参加し内藤チームが4位と健闘した。

世界同時大会は実施時間帯を金曜日の夜から午後に変更したため、前年比7割近い参加者増となった。一方、PABF同時大会は休日のセクショナルやクラブリーグとの重複のため前年比2割近い参加者減となった。

マインドスポーツの国際大会実現に向けての動きでは、日本チェス協会、

日本棋院（国際囲碁連盟）、日本ペア囲碁協会とともに、IMSA(International Mind Sports Association)日本支部を設立し、定期的に会合を開いて情報交換を行っている。